

平成30年 5月28日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26420639

研究課題名(和文) 中世禅院における建築造形の流通と空間の意味に関する建築史的・対外交渉史的研究

研究課題名(英文) Historical research on the architectural design and the cultural network in medieval Zen sect

研究代表者

野村 俊一 (NOMURA, Shunichi)

東北大学・工学研究科・准教授

研究者番号：40360193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：中世禅院の「建築造形」がどのように流通し、空間に意味を及ぼしてきたのか。この課題を明らかにするため、本研究では中世の折衷様建築や中国の遺構、関連する絵画・文献史料をも考慮し、とくに「大虹梁」、「天井」、「付書院」に焦点を絞り具体的検討を行った。仏殿の梁銘や天井意匠にみる室構成や格式、建築内部の空間と外部の山水とをつなぐ建築装置など、日中の各事例に類似性と差異を見出すことができた。

研究成果の概要(英文)：How was the 'architectural design' of the Zen sect in the Middle Ages circulated and had a meaning in space? In order to clarify this problem, this study considers the eclectic architecture made in the Middle Ages, wooden building in China, related image historical materials and literature historical materials and document historical materials. We found similarities and differences in each case between Japan and China, such as the composition and form of the room as seen in the design of the beams and ceilings of the building, as well as building equipment that connects the space inside the building with the external landscape.

研究分野：建築史

キーワード：禅宗様 大仏様 和様 中世仏堂 空間 意味 禅院 様式

1. 研究開始当初の背景

13世紀末、禅宗が中国から日本へ本格的に移入するようになると、禅院は檀越を獲得しながら勢力を全国へ次第に伸ばし、順次、功山寺仏殿(山口・1320年)などの「禅宗様」建築を、竜吟庵方丈(京都・1387年)などの初期「書院造」を造営するようになった。仏殿や方丈の新たな様相を具現化させ、北山文化や東山文化を代表する景観を展開させたのである。

このような禅院の建築をめぐる歴史的経緯のもと、建築史学では禅宗様建築の実態やその造営組織、建築の周辺環境について(太田博太郎・横山秀哉・関口欣也・永井規男・高橋康夫など)、また書院造や禅院方丈の実態について(堀口捨己・太田博太郎・太田静六・平井聖・川上貢など)研究が進捗し、様式・形式で把持される建築の全体像が明らかにされてきた。

しかしながら、13世紀末以降に禅院が日本で展開していくなかで、「建築造形」建築を構成し特徴付ける「部分」の要素は、各々どのような経緯と背景のもと中国からもたらされ、日本全国へと伝播したのだろうか。さらには、これら「建築造形」が集合した各空間は、どのような社会的・宗教的文脈のもと意味を持つようになったのだろうか。

各部分の「建築造形」は、建築全体の様式・形式とは別に、固有の履歴をもつ。かつ、同一の「建築造形」でも、用いられた構法や布置された場所、採用された地域やコンテキスト次第で、さまざまな意味を空間に与える。このような問題関心および歴史観に立脚し既往研究を振り返ると、確かに、全体の建築様式を前提に、「建築造形」を共時的に相对比较する試みは散見される(浅野清・関口欣也)。しかし、個別の「建築造形」が、いかに東アジア海域の中で流通し、各地域の構法のもと用いられ、空間に意味を及ぼしてきたのかという問いについては、社会的・宗教的文脈まで考慮した通時的・悉皆的な検討が不十分なのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中世禅院の建築にみる「建築造形」建築を構成し特徴付ける「部分」の要素が、どのように東アジア海域のなかで流通し、各地域で取捨選択され、建築の「全体」のなかで再構成されるに至ったのかについて、そしてこれらの集合としての空間が、どのような社会的・宗教的意味を持つようになったのかについて検討することである。本研究ではとくに「大虹梁」、「天井」、「付書院」にそれぞれ着目し、関連する折衷様建築や中国の遺構も合わせた現地調査と、絵画・文献史料などの調査を通して、仏教的世界像や王法仏法相依論といった社会的・宗教的文脈を考慮しながら検討するものである。

3. 研究の方法

中世禅院の「建築造形」がどのように流通し、空間に意味を及ぼしてきたのか。この課題を明らかにするため本研究では、中世創建の折衷様建築や中国の遺構、関連する絵画・文献史料にみる事例をも視野に入れ、とくに「大虹梁」、「天井」、「付書院」に焦点を絞り、大きく以下三つのテーマを設定し、鎌倉・室町期と唐・元代の事例調査から具体的検討を行った。

(1) 大虹梁の流通と梁銘 上間・下間の分節と空間の署名

禅院の仏殿は、黎明期の唐代には存在が認められなかった。しかし、のちに南宋および鎌倉・京都五山で造営されるようになり、仏像を奉るのみならず禅僧や檀越のための儀礼会場として使用されるようになった。原則、これらの儀礼は集団で行われるため、広い空間と職位別・儀礼別の使い分けが必須となり、しばしば「上間」と「下間」という空間が用意され、これらを実現させる架構が築かれた。柱を省略して荷重を支承する「大虹梁」は、この架構のなかでも最も重要な建築造形の一つである。大長材ゆえに供給量も少なくその市場価値も高騰し、日本の禅院から中国へ貨幣価値を伴って寄進されることもあった。中国でも五代十国時代から確認され、禅院にとどまらず日本の中世仏堂でも広く用いられるようになった。しかし、その使用時期や方法、具体的な構法は地域により異なり、また支承する柱の布置もあわせ、地域別の流通と使用法の系譜には不透明さも残る。また興味深いことに、中国の仏殿と日本の五山ではしばしば大虹梁の下端に梁銘が刻まれ、空間別に内容と署名が区別されていた。以上をふまえて本テーマでは、東アジア海域において大虹梁がどのように流通し、それぞれ空間に意味を与えてきたのかについて、とくに日本の五山派叢林の仏殿に着目し基礎的な検討を進めた。

(2) 天井・藻井の布置と仏教的世界像 王法・仏法の相依とその空間

空間に意味を及ぼす重要な「建築造形」の一つに天井が挙げられる。日本中世の禅院仏殿および中世仏堂は、建物中央に設けられた平天井を廻らすかのように、周囲が化粧屋根裏天井となるものが多く、この中心に概ね仏像や厨子が奉られた。いっぽうの中国では、日本のような平天井を張って野小屋を設ける事例よりも、建物全体に化粧屋根裏天井を施したもののほうが多数確認できる。留意したいのが、上間・下間それぞれに「藻井」といった装飾天井が設けられ、しばしば本尊あるいは為政者を荘厳するかのような空間が演出されたことである。以上をふまえて本テーマでは、東アジア海域において天井とその意匠が、どのように流通し、それぞれ空間に意

味を与えてきたのかについて検討した。

(3) 中世日本の付書院と<山水> 東アジア海域にみる琴棋書画と<山水>受容
禅院が興隆した時期は、中国から唐物が盛んに請来され、座敷飾が定着した時期でもある。座敷飾は会所や書院造のなかで萌芽し、唐物を飾り立てるためのいわばギャラリーとして、武家はもとより僧侶の住宅でもてはやされた。なかでも南宋絵画にも源流がみられる付書院は、かつて建築史学において、文房具を置き、読み書きするための場として説明されてきた。しかし、設置された唐物にとどまらず、周囲の庭園なども含めた包括的な空間、ひいては隣接する<山水>を包括する環境についてまでは言及されてこなかった。東アジア海域においてこの付書院は、どのように流通し、周囲の庭園や唐物などと取り合わせられ、環境の意味を演出してきたのであろうか。以上をふまえて本テーマでは、庭園や盆栽、立花なども考慮したうえで、建築と<山水>あるいはその模造品が、付書院を中心にどのように取り合わせられてきたのかについて、日本鎌倉期 室町期、中国宋代における日中の絵画史料をもとに、建築造形の特徴および流通の系譜や、禅院で流布した思想的背景もあわせて検討した。

4. 研究成果

以下、三つのテーマ別に成果の一端を記したい。

(1) 五山派叢林の仏殿にみる梁銘

まずはテーマ(1)についてみてゆこう。本テーマでまず注目したのが、鎌倉で創建された建長寺仏殿にみる梁銘の存在と、創建当初の実態である。『和漢禅刹次第』には建長寺仏殿の「上間」・「下間」それぞれに架けた虹梁の銘文が記されており、前者は檀越となる北条時頼が、後者は開山となる蘭溪道隆(一二一三 七八)が建長五(一二五三)年一月二五日に記したことがわかる。詳細な小屋構造までは不明なものの、ここから、創建当初の建長寺仏殿にも上間・下間と、各々に架けられた虹梁とが計画されたことが明らかである。「建長寺指図」(図1)にも描かれた再建仏殿との差異は不透明ではあるが、鎌倉期の東国に造営された鑊阿寺本堂の実態や、そのほかの五山仏殿の絵図、上間・下間という空間分節のあり方などをふまえると、創建仏殿においても柱を省略あるいは移動させ、梁を掛け渡すことで、空間の規模を操作していたと考えられる。今後の新出史料の発掘と併せて検討したい。

また、『扶桑五山記』によれば、ほかにも南禅寺・天竜寺・東福寺といった京都五山にくわえ、東福寺に隣接していた三聖寺における仏殿の梁銘も存在し、すべて上間のものに檀越あるいは天皇が、下間のものに時の住持が題したことがうかがえる。他方で、永和二(一三七六)年一〇月二九日に上棟した円覚

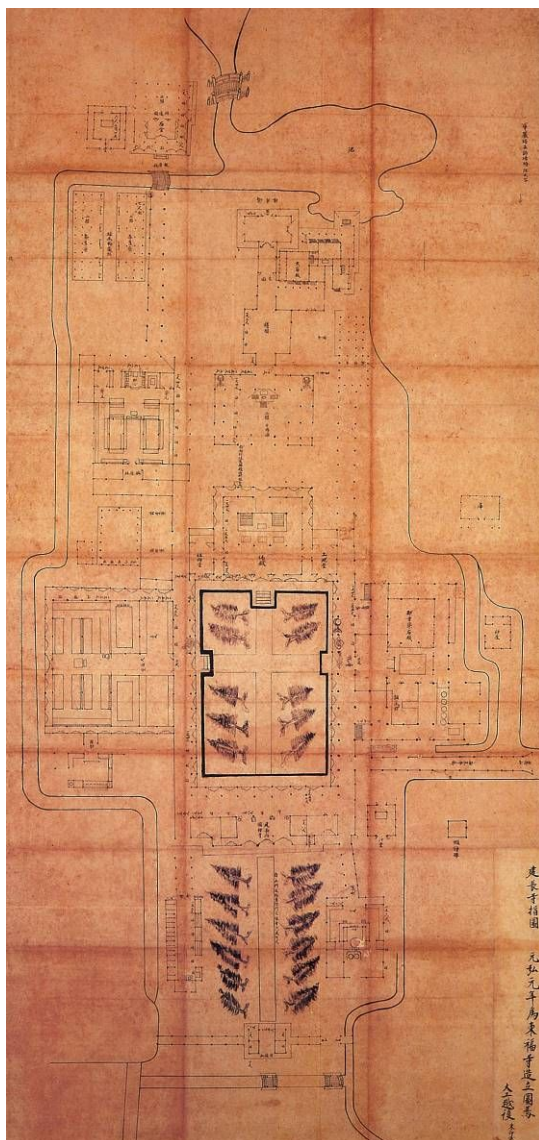


図1 建長寺指図

寺仏殿の牌銘が現在にまで伝わっているが、『円覚寺史』ならびに玉村竹二によれば、上間のものには当時の住持だった此山妙在(一三七七)が、下間のものには檀越たる足利義満が題したとされる(『円覚寺仏殿梁牌銘』)。しかし、近年この梁銘牌が重要文化財に指定されたさい、それぞれの内容が両者逆であったものとして修正されたようである(その理由については残念ながら公表されていない)。

いずれにせよ、確認しうる五山派叢林の仏殿には「上間」・「下間」と、各々の空間に架かる虹梁とが存在したことが明らかである。先に挙げた五山仏殿の平面を表した絵図や、鑊阿寺本堂など同時代・同規模の類例をも勘案すると、この虹梁は小屋組の鉛直荷重を分散させ、空間を拡張するために用いられたと類推できるのである。なお、この梁銘はのちの日本建築ではほとんど流通せず、現存する中世における実物の梁銘は管見の限り存在しない。他方で、中国でも仏光寺東大殿を筆頭にこの梁銘が散見され、梁間、桁行方向など様々な配置が確認できた。今回の研究プロ

プロジェクトでは中国全土の膨大な事例をすべて検討することはかなわなかったが、本研究をもとに引き続き東アジアにおける梁銘の事例収集に努めたい。

(2) 日中仏殿の天井と空間

次に、テーマ(2)についてみてみよう。仏殿の空間を構成する重要な要素の一つに、天井が挙げられる。例えば鏝阿寺本堂では、方三間となる組入天井の周囲を廻らすように、入側に化粧屋根裏天井が張られている。また「円覚寺仏殿造営図」に掲載されたものも、中心部の天井意匠こそ不明だが、化粧屋根裏天井が周囲を取り囲んでおり、断面から見た天井の構成が共通している。前者では、この構成に「内陣・礼堂」という形式が組み合うことで空間がさらに分節され、とくに礼堂では、柱間装置で囲まれた一つの空間のなかに、化粧屋根裏天井と組入天井とが混在する構成となっている。

このような天井意匠を可能にしているのが、いわゆる野小屋の存在である。野小屋は、日本では法隆寺大講堂(奈良・九九〇年)を嚆矢に一〇世紀から増えはじめ、やがて梁間方向に空間を拡張するための一手法として、孫庇や双堂を用いる方法をも巧みに取り入れながら展開した。この手法の一つ屋根の下で用いた当麻寺曼荼羅堂は、切妻の建物を梁間方向に二つ並べ、全体を一つの屋根で覆うという考えのもと実現しており、間面記法ではもはや表記できない規模の空間を獲得している。天井を張ることで小屋の中を隠しているため、ここに収めた架構は化粧する必要がなく、屋根荷重を支え建物を自立させるだけのものとして計画することができ、さらに小屋のなかに筋交・小屋束・桔木など、構造補強のための部材を適宜追加することもできる。ここにおいてもはや、母屋桁と柱割とが揃う必然性は失われ、小屋組と軸部にある種の断絶が生じている。そして、断絶した相互の境界面となる天井は、組入天井のように水平構面として用いられる場合をのぞき、原理的に交換可能である。このことはすなわち、天井の意匠も交換可能であり、恣意的に選択されうるものだったことを意味している。

ところで、建物中心部の平天井を化粧屋根裏天井で囲むという構成は、ほかの中世仏堂や禅院の仏殿でも数多く確認できる。鎌倉期ともなるとこの構成の採用例は増えてゆき、方五間以上の規模をもつ大報恩寺本堂や明通寺本堂、西明寺本堂など、関西や北陸で見られるようになる。また、鏝阿寺本堂と同様に、礼堂に平天井と化粧屋根裏天井が混在するものも多く現存する。方三間のものが多く現存する禅院の仏殿ともなると、梁間四間の不動院金堂も含め、すべて周囲が化粧屋根裏天井となっている。

このような構成が派生した理由とは一体何か。例えば鏝阿寺本堂の架構システムは、

「身舎・庇」構造をもとにみると、側柱を移動させ空間を拡張させたものと解することは先にも触れたとおりであるが、この操作により全体の架構と規模も変化したため、天井意匠で新たな「身舎・庇」を表象・代理し、再定義したものと理解するとわかりやすい。天井は原理的に交換可能であるため、その意匠にはさまざまなバリエーションがあり得るはずだが、ここまで中世仏堂や禅院の仏殿全体を通して一定の傾向がみられるということは、当時、共通する意匠への志向性があったと考えるのが自然である。つまり、空間の拡張とともに屋根荷重を支える複雑な架構を隠し、それとともに空間のまとまりを新たに標し付ける一要素として、天井意匠は重要な役割を果たしていたと理解できるのである。

ここで注目したいのは、建物の中心部となる「身舎」を表象・代理した天井に、いくつかのバリエーションが存在することである。例えば方五間のものを見ると、浄土寺本堂のように仏像あるいは厨子の上部全体を高くした事例や、明通寺本堂のように内陣中央間のみを支輪で持ち上げた事例、内陣の天井全体を高くした事例(長弓寺本堂・大善寺本堂・松生院本堂・本山寺本堂・長保寺本堂・国分寺本堂)のほか、礼堂の身舎部分が船底天井の妙楽寺本堂や礼堂身舎部分が輪垂木天井の明王院本堂のように、内陣と礼堂の天井意匠に差別化を図った事例など、天井組子の大きさを変えたり支輪で天井を持ち上げたりすることで、空間の質に変化を与えている。また、鏝阿寺本堂や孝恩寺観音堂のように、身舎の天井高と意匠が内陣と礼堂とで同一になっているものもある。

方三間の禅院の仏殿ともなると、おおよそ建物の中心に鏡天井が位置しており、全体の規模の小ささや周囲を廻らす扇垂木による化粧屋根裏天井の視覚的効果も相まって、全体は求心的な空間となっている。そして、この空間に、仏像や厨子が奉られる傾向にあるのも看過できない。

では、中国の事例では天井はどのようなになっているのか。

北宋代に編纂された『营造法式』(巻八 小木制度三)は、天井の種類として大きく「平棊」・「鬪八藻井」・「小鬪八藻井」の三種を挙げている。「平棊」とは華文や雲文などの装飾を施し、「平棊方」という格縁を用いた格天井のことで、装飾がなく方縁を用いた「平闇」(小組格天井)と区別される。「鬪八藻井」・「小鬪八藻井」はともにドーム状の装飾天井のことで、後者が「小木作」というより小さい寸法体系の組物を用いて緻密につくられている。

同書が編纂された一二世紀初頭には、このように天井形式が分類されていたことをうかがえるが、興味深いことに遺構をみる限り、「平棊」や「平闇」といった平天井を張る仏殿は、全体の数に比べて総じて少ない。平天

井を建物全体に用いて野小屋を形成するのは、平闇が採用された仏光寺東大殿（山西省五台县・八五七年）を嚆矢に、平棊を用いた蘇州市玄妙觀三清殿（江蘇省蘇州市・一一七九年）などが現存している。しかし圧倒的に多いのは、平天井を張らずに仏殿全体に化粧屋根裏天井（徹上露明造）を採用し、虹梁や束など小屋内部を露出させ、多様な墓股（駝峰）や通肘木を陰刻などで綾取った事例のほうである。奉国寺大殿や善化寺大雄宝殿も、ともに当初は平天井ではなく化粧屋根裏天井が全体に用いられており、ここに、同規模の梁間をもつ日本の中世仏堂や禅院の建築との大きな違いが見出せよう。

他方で、この化粧屋根裏天井をベースに、藻井を用いたケースが散見される。例えば、下華嚴寺薄迦教蔵殿（山西省大同市・一〇三八年）や隆興寺摩尼殿（河北省正定県・一〇五二年）、保国寺大殿、善化寺大雄宝殿、永安寺伝法正宗殿（山西省渾源県・一三一五年）など、華北地方での事例を中心に、江南地方にも伝播しているさまをうかがえる。また、浄土寺大雄宝殿（山西省応県・一一二四年）や永楽宮三清殿（山西省芮城市・一二六二年）のように、平棊と組み合わせた事例も存在する。

留意したいのが、この藻井と仏像・神像それぞれの位置関係である。日本の場合を振り返ると、禅院の仏殿や中世仏堂では、「身舎・庇」を表象・代理した天井構成をもとに、仏像の直上は折上天井になっていたり、詳細な天井組子を用いたものになっていたり、鏡天井を中心とした求心的な構成になっていた。いっぽうの中国の場合では、藻井を用いることで、ここでも仏像の直上を豪華に荘厳した事例をいくつか見出すことができる。例えば、木造建築のなかで藻井が確認できる最古の事例として、樓閣建築の独楽寺観音閣（天津市薊県・九八四年・図2）が挙げられるが、観音像の直上に闘八藻井が位置している。ほかに先に挙げた隆興寺摩尼殿や下華嚴寺薄迦教蔵殿、浄土寺大雄宝殿、永安寺伝法正宗殿など、華北地方に存在する仏殿でも、同様に仏像の直上あるいは仏殿の中心に藻井が設置される傾向にある。このようなことから藻井は、木造建築に登場して以来、仏像上部を荘厳する意匠の一つだったことが明らかである。

留意したいのは、保国寺大殿や永楽宮三清殿などのように、一一世紀以降の江南地方や華北地方の南方では、仏像・神像の直上ではなく、その前方の空間に藻井が位置付けられたものが登場することである。また、真如寺大殿のように、仏像直上が化粧屋根裏天井になっているものの、平棊と小木作の組物とで装飾した天井が建物前方のみに位置付けられたものも登場する。しかもこの場合、野小屋とともに天井を設けているので、天井意匠が恣意的に決定された可能性が高い。

これらの事例では、仏像・神像の上部を荘

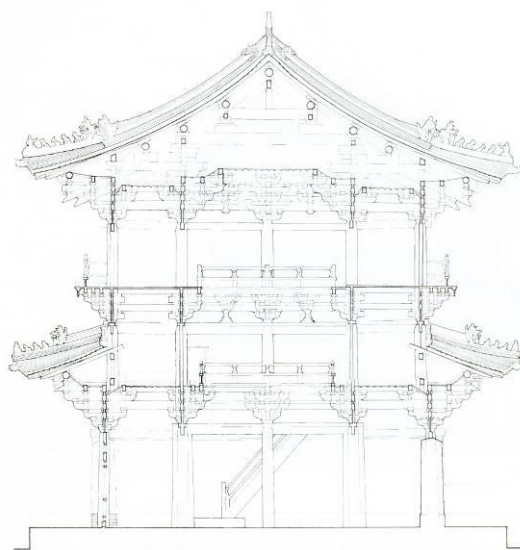


図2 独楽寺観音閣

厳するはずだった藻井などの装飾天井が、下間にあたる位置に採用されるようになっていたのである。つまり、仏像・神像よりも礼拝や儀礼を行う人間を荘厳するかのよう演出されている。ここに、中世日本の仏殿との大きな違いの一端が認められるのである。以上の検討結果のもと、今後も現地調査と併せたより詳細な検討を継続したい。

（3）付書院と窓 建築と山水とをつなぐ手法をめぐって

最後にテーマ（3）についてみてみよう。まず、日本の絵巻物から、付書院の機能と意味、置かれた環境を通観した。読み書きの場や唐物を飾る場としてはもちろん、その場は建築本体よりも小さなスケールをもとにした意匠により飾られていた。そして、庭園や盆栽、自然を描いた屏風など、山水をモチーフとした模造品が付書院の内外で鑑賞できるように取り合わせられていたことが明らかとなった。この事態は、実際に会所の御飾書などにも記載され、室町將軍邸における会所を中心に踏襲されていった。平行して当時の知識人たちの住宅においても採用され、いわば付書院は、建築と山水とを繋ぐ蝶番の一種として、座敷飾の重要な要素としてデザインされていたのである（図3）。会所をはじめとする文芸的会合の場は、中国から将来された唐物が飾られ、歌合の場や洲浜といったいわゆる「風流」な文芸を生んで

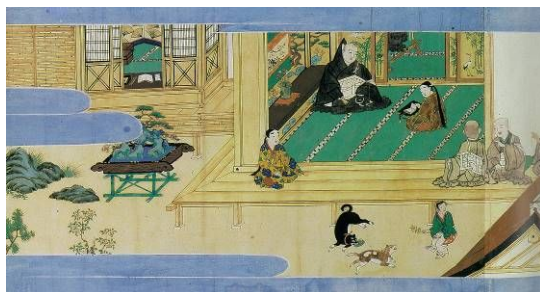


図3 慕帰絵詞

いったとともに、これらの文芸を包摂するかのよう政治的な場へと変容していった。この舞台を整えるうえで重要な構成要素として、山水が位置づけられるのである。

他方で、中国絵画の代表例を通観すると、山水に隣接した建物の内部において、風流韻事となる琴棋書画を嗜む場面を多々散見することができた。とくに琴・棋・書の場面が確認できることに特徴を求められるだろう。また、山水のただ中にある建物の特徴として、堆い場に立てられた亭や水上の亭から外部の山水を眺める場面が数多く認められる。

このような場から広大な山水を臨みながら琴棋書画を嗜むという文化が、おそらく禅院を経由して日本にも将来されたと思われるが、中国絵画を見る限り、日本の付書院のような、建物本体と比べ小さいスケールの建具中国でいうところのいわゆる小木作が設けられた場面はみられない。中国の場合は、窓辺に机のほか椅子や榻といった移動可能な家具・道具類を設置するのみだったものが、日本では作り付けの移動不可能なものへと変化しているのである。そして、いっぽうの日本の絵巻物にみられる山水は、中国絵画で描かれたような広大なものというよりも、むしろ縮小させたミニチュアである。おそらくひとつに、このミニチュア化あるいはそれを鑑賞する場の緻密化にこそ、日本建築史上にみる山水受容の文化の特徴があったのではないかと思われるのである。それとともに、琴や弈棋といった文芸を山水とともに嗜むという場面は日本の絵巻物にはみられない。このようなところにも、偶然か必然かまではわからないものの、東アジア海域における建築・山水をめぐる文化の取捨選択があったことをうかがえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

嶋田瑛・野村俊一・西松秀記・村松裕・河原塚和子・永友貴博、東国中世折衷様建築にみる来迎柱後退の技法について、日本建築学会学術講演梗概集 2016(建築歴史・意匠)、査読無し、2016、pp.565-566

村松裕・野村俊一・西松秀記・河原塚和子・嶋田瑛・永友貴博、東国中世折衷様建築にみる柱高と床高について、日本建築学会学術講演梗概集 2016(建築歴史・意匠)、査読無し、2016、pp.567-568

野村俊一、『五山十刹図』制作・将来者再考、佛教藝術、査読有り、2014、

pp.33-59

〔学会発表〕(計3件)

野村俊一、『建長寺指図』と仏殿・法堂・衆寮、鎌倉禅研究会、2015.10.21、建長寺應供堂(神奈川県鎌倉市)

野村俊一、中世日本住宅の付書院と山水、絵画空間研究会、2015.7.16、東北大学(宮城県仙台市)

野村俊一、中世禅院の山水と夢窓疎石西芳寺と瑞泉寺、風景史研究会、2015.6.14、東京工業大学(東京都目黒区)

〔図書〕(計5件)

天野文雄・末木文美士・重田みち・大田壮一郎・川本慎自・原田正俊・クリスティアン・ウィッテルン・野口善敬・鈴木元・中本大・太田亨・恋田知子・島尾新・神津朝夫・西山美香・荒木浩・西平直・野村俊一・上田純一・大谷節子ほか、ペリカン社、禅からみた日本中世の文化と社会、2016、pp.265-287

空間史学研究会編・野村俊一ほか、岩田書院、空間史学叢書2 装飾の地層、2015、総p.269

田路貴浩、野村俊一ほか、昭和堂、日本風景史、2015、pp.113-144

村井章介、野村俊一ほか、勉誠出版、東アジアのなかの建長寺 宗教・政治・文化が交叉する禅の聖地、2014、pp.329-345

長岡龍作、野村俊一ほか、竹林舎、仏教美術論集 第四巻 機能論 つくる・つかう・つたえる、2014、pp.398-420

6. 研究組織

(1)研究代表者

野村 俊一 (NOMURA, Shunichi)
東北大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：40360193